

7
July

- 6/29 [金]—1 [日] 『マクガワン・トリロジー』◎PLAT主ホール
- 1 [日] 虹の会 第25回ピアノ演奏会◎PLATアートスペース
- 4 [水]—6 [金] 豊橋演劇鑑賞会 第267回例会 NLTプロデュース『しあわせの雨傘』◎PLAT主ホール
- 5 [木] 『Duo Alvarito』Premier Concert au Japon ～すべての出会いに感謝して～
アレクサンドル・アルヴァレス&伊藤修子 チェロ・ピアノデュオコンサート◎PLATアートスペース
- 6 [金] BOSSA NOVA LIVE 2018 "BOSSA FOR EARLY SUMMER"◎PLATアートスペース
- 8 [日] チャボロ・シュミット・トリオ『ジャズ・ナイト・イン・バリ』◎PLAT主ホール
- 10 [火] シリーズ古典遊学 文楽学び塾◎PLATアートスペース
- 11 [水] シリーズ古典遊学 歌舞伎学び塾◎PLATアートスペース
- 13 [金] アンサンブル・プリンチピ・ヴェネツィアーニ「イタリア初期バロックと魅惑のカウンターテナー」◎PLATアートスペース
- 15 [日] 松竹大歌舞伎◎PLAT主ホール
- 19 [木] 第36回西田メディカルクリニック講演会「胃カメラ検診をのあとに!」◎PLATアートスペース
- 22 [日]—23 [月] 『キス・ミー・ケイト』◎PLAT主ホール
- 22 [日] 第40回さなぎ会発表会◎PLATアートスペース
- 25 [水]—28 [土] 第71回 中部日本高等学校演劇大会 愛知県大会東三河地区の部◎PLAT主ホール
- 27 [金]—28 [土] 伊藤郁女『私は言葉を信じないので踊る』◎PLATアートスペース

8
August

- 2 [木] プラットワンコインコンサート Le deux mai『リズム・ステップ・ダンス～舞曲で巡る世界～』◎PLATアートスペース
- 5 [日] ザ・ヤングアメリカン ジャパンツアー 2018 夏 IN豊橋◎PLAT主ホール
- 8 [水] 『消えていくなら朝』◎PLAT主ホール
- 11 [土・祝] 桜丘高校 和太鼓部 自主公演◎PLAT主ホール
- 11 [土・祝] 近藤音楽教室ピアノ発表会◎PLATアートスペース
- 14 [火]—15 [水] 『あなたの初恋探します』◎PLAT主ホール
- 18 [土] 鈴木馨パレスタジオ「ザ・オドリ」◎PLAT主ホール
- 18 [土] 雅楽「千里」が贈る 子どもに伝えたい伝統文化のコラボレーション「王朝のみやび」◎PLATアートスペース
- 22 [水] 第17回 小中学生による芸能フェスティバル◎PLAT主ホール
- 24 [金] CBDC PARTY◎PLATアートスペース
- 26 [日] 第9回ファミリーコンサート オペラ「シンデレラ」(豊橋シティーオペラ編 日本語上演)◎PLAT主ホール
- 26 [日] 中部の私立大学・短期大学 大学展◎PLATアートスペース
- 30 [木]—31 [金] 二兎社『ザ・空気 ver.2』誰も書いてはならぬ◎PLAT主ホール

表紙/「松竹大歌舞伎」
尾上菊之助『曾我経依御所染』御所五郎藏
企画・発行/公益財団法人豊橋文化振興財団
編集・デザイン/味岡伸太郎+有限公司STAFF
平成30年6月発行 32号[隔月発行]



公益財団法人
豊橋文化振興財団情報誌
2018年7月-8月
vol. 32



TOYOHASHI
ARTS
THEATRE
PLAT

PLAT CALENDAR



CONTENTS

- 表紙「松竹大歌舞伎」 2
- INTERVIEW: 「松竹大歌舞伎」
とにかく、キザにかっこよく
「五郎藏」を
演じたいと思います。
尾上菊之助 4
- TOPICS 「私は言葉を信じないので踊る」
伊藤郁女 6
- INTERVIEW: 2 「マクガワン・トリロジー」
殺伐とした中のデリケートで
繊細な人間のお話。
浦辺千鶴 8
- INTERVIEW: 3 「ザ・空気 ver.2」誰も書いてはならぬ
これは、私たち自身の物語でもある。
永井愛 10
- INTERVIEW: 4 「消えていくなら朝」
演劇のいろんな形を楽しんでください。
宮田慶子 12
- INFORMATION PLAT主催公演情報 14
- PURA PURA バロコの寄り道ぶらぶら 桑原裕子
オリザさんにはいつもやる気をもらいます。 15
- SUPPORT/TICKET CENTER 16
- PLAT CALENDAR

松竹大歌舞伎

平成三十年度(公社)全国公立文化施設協会主催 東コース

7月15日[日]12:00開演・16:30開演
出演 尾上菊之助、板東彦三郎、
中村梅枝、中村米吉、市村橋太郎、
中村萬太郎、市川團藏
会場 二PLATホール



INTERVIEW:1

—— 今回の演目の一つ、『御所五郎蔵』の見どころからお願いします。

菊之助—— まず、河竹黙阿弥が書いた七五調の台詞の、リズムを感じていただければと思います。黙阿弥の台詞は、興行主に親切、お客さまに親切、役者に親切で、3親切といわれ、お客さまに非常に聞き取りやすい言葉で書かれています。

として、男伊達、侠客・星影土右衛門、この二人の遺恨を始め、争い、ケンカまでの、駆け引き、男の意地の張り合いをお見せできればと思います。吉原仲之町の華やかさも見逃せません。

次は、縁切りです。旧主のためにその金策に駆けずり回る五郎蔵に、相手役の臯月が、お金を渡してわざと縁を切るのですが、五郎蔵が短気を起こして啖呵を切ります。胡弓という楽器が入った縁切りが一つの見せ場ですが、ボタンの掛け違いによる悲しさも一面であります。

最後は、傾城逢州が闇夜の道中をして、花魁道中の美しさも見ていただける。同時に、殺しの場面では、陰惨さだけでなく、暗闇の中、女形の美しさを見せるのです。そのような歌舞伎美を期待していただきたいです。

またその前の『近江のお兼』は、華やかな舞踊なので、つややかな女形も見られます。歌舞伎のおいしいところが凝縮されている公演になっています。

—— 黙阿弥作品は、何が魅力でこんなに長く愛されていると思われませんか。

菊之助—— リズムが良く分りやすいところだと思います。そして勸善懲惡ものが多いということです。とにかく黙阿弥さんは、親切です。お客さまが、溜飲を下げると言うか、お客さまが「ああ」と思うところが凝縮されていることが、黙阿弥作品の魅力です。

—— としてもう一つの『高坏』も、初心者の方が見ても本当におもしろいですね。

菊之助—— 六代目菊五郎が、その当時はやっていたタップダンスを日本舞踊に取り入れたらどうなるかと作った踊りです。1回途絶えたものの、十七代目の勘三郎が、作曲・振り付けを再構築され、六代目の創作の魂が、現代でも息づいています。『高坏』という踊りは、花見に出掛け酒宴を開こうとするが、高杯がないので次郎冠者が買いに行くのです。しかし、高杯がどんなものか知らず、高足(高下駄)を買ってしまう。預かったお酒も飲んでしまい、浮かれて下駄でタップするのです。下駄でタップするのは大変ですが、見せ場ですし、おもしろいところです。

これも掛け違いで、主人に頼まれた使いのものが間違ってしまう、狂言のおもしろさをストレートにお伝えて

できればと思います。

—— 下駄のタップダンスは、初めてやられてみてどうでしたか。

菊之助—— 大変な修練がいりますが、楽しんでおります。桜が満開の中、酔って踊るおかしみをお伝えてできればと思います。

—— 彦三郎さん、梅枝さん、米吉さん、橋太郎さん、萬太郎さん、團藏さん、この座組で、どんな空気を全国に届けられようですか。

菊之助—— 和気あいあいとしているので、何も気負うことなく、ひたすら自分の芝居に打ち込んで、良いお芝居をお届けすることだけ考えれば良いから、本当に心強いです。

—— 菊之助さんは、何をあと目指さなければいけないとお思いますか。

菊之助—— その演目の本質(性根)をしっかり捉えられるようになりつつあり、やっとスタートラインです。そうすると、変にぶれないというか、筋道が分かるので、それが分かるまで、例えば、踊りの体ができていなかったり、台詞の声を出す準備ができていなかったりすると、やはり、役になりきれません。声の出し方、体の使い方一つ、やっと理解ができてきたところです。それまでの準備がやはり歌舞伎役者は大変なのです。

だから25日間飽きずにできるのです。本質がつかめないとやはり飽きてしまうと思うのです。これから一日一日の公演をもっともっと追求しないとイケないし、もっともっと楽しみたいと思います。

—— それは、見る側にとっても、歌舞伎の魅力の奥深さにつながるのでしょうか。

菊之助—— 400年残ってきているのは、戯曲のパワーであり、キャラクターの持つパワーです。残っているイコール、その力があるということです。その力を出しきれるか、その戯曲がおもしろくなかったと思われるかは役者次第です。毎月毎月、本当に崖っぷちで、非常にスリリングです。

—— 今回の演目では、お父さまから何か言われているのでしょうか。

菊之助—— 父は、教えるというよりも、「見て覚えろ」で、細かくは言わないのですが、とにかく、五郎蔵に関しては、キザにかっこよくやれと、そこしかないと思うのです。

私も、父の五郎蔵を、間近で勉強してきました。

—— 豊橋のお客さまにも何か一言お願いします。

菊之助—— 豊橋は、日本の伝統文化を大事にしてらっしゃるところですので、私たちが伺うのが本当楽しみですし、ご期待していただければと思います。

とにかく、キザにかっこよく
「五郎蔵」を演じたいと思います。
尾上菊之助 出演

尾上菊之助[おのえ・きくのすけ]／昭和52年8月1日生まれ。尾上菊五郎の長男。59年2月歌舞伎座『絵本牛若丸』で六代目尾上丑之助を名のり初舞台。平成8年5月歌舞伎座『弁天娘女男白浪』の弁天小僧ほかで五代目尾上菊之助を襲名。

国、世代を超えて胸を打つ瞬間

乗越たかお

作家・ヤサぐれ舞踊評論家

世界的に活躍する女性ダンサーが、70歳を越えた実の父親と踊る作品…… 想像がつからうか。白髪の父親は矍鑠としているが、年相応のご老体ではある。それがけっこう「大丈夫か?」と思うくらい踊ったりする。描かれるのは父と娘、二人のアーティストと、その関係性である。これは目の肥えたヨーロッパの観客をはじめとして、世界的に大ヒットしている作品なのだ。

海外で活躍している日本人ダンサーは少なくないが、中でも伊藤郁女は飛び抜けた存在だ。子どもの頃から習っていたバレエの技術に支えられ、繊細にコントロールしつつ驚異的な柔軟性、爆発的なエネルギーに満ちた動きは、舞台上で圧倒的な存在感を發揮する。世界的に有名な振付家が伊藤を自らの作品に招いては重要な役を任せてきた。日本でも人気の高いフィリップ・ドックフレの『イリス』(2003)では作品全体のイメージを担う存在だったし、渡仏してこれまた人気のアンジェラン・ブレルジョカージュのカンパニーに入団するや、『四季』(2005)等で来日公演を重ねた。さらにベルギーを代表するアラン・プラテルのカンパニーが、亡くなったピナ・バウシュに捧げた『Out of Context - for PINA』(2010)では、9人の強烈な個性を持ったダンサーの一人として舞台に君臨した。さらにプラテルのカンパニー出身で、いまや最も忙しい振付家の一人、シディ・ラルビ・シェルカウイとも協働している。とくにオペラ『眠れる美女』(2008)は、川端康成の原作をギー・カシアスが演出し、シェルカウイが振り付けたもの。行き場のない老人の情欲が、薬で眠らされた若く美しい女性を前に切なく渦巻く。伊藤郁女は眠る美女役で、舞台上で半身を吊られ、アクロバティックかつ深い情緒を描いた。

そして振り付けにも旺盛に取り組んでいる。日本でも、その才能は早くから注目を集めていた。『The Broken Heart』(2002)の頃はまだ大学生だったが、舞台袖からゆっくりと這うように出てくる。足がどこから生えているのか、一瞬とまどうような特異な身体だった。『Solos』(2009)は様々な装飾品を身につけては取り去りつつ踊り、逆に身体の存在を浮き上がらせた。『Asobi』(2013)はプラテルのカンパニーのプロデュース。舞台全面に鏡があり、ダンサー達はその前をゆっくりと横切る。しかしその衣裳は半身しかないのだ。客席からは着衣のままに見えるが、鏡に目をやると、半分の裸体が浮かび上がる。

以上は日本で上演された物に限っているが、ほかにも多くの作品がある。筆者は3年前にパリの劇場で、1週間日替わりのダンスのプログラムのなか、伊藤郁女だけが2作品上演するように組まれているのを見て、その人気の高さを再認識したものだ。

ちなみにそのときの作品のひとつが本作である。

伊藤が踊る実の父親・伊藤博史は彫刻家で、国内のみならず海外から製作や展覧会のオファーが来るほど。大学では美術と音楽を修め、ステージデザインなども手がけたそうだが、ダンサーではない。

タイトルは『私は言葉を信じないので踊る』だが、冒頭から大量のセリフで始まる。そして作品全般にわたって、言葉はけっこう使われる。そのほとんどは、伊藤自身による父への問いかけだ。



7月27日[金]19:00開演・28日[土]14:30開演

テキスト・演出・振付＝伊藤郁女

出演＝伊藤郁女、伊藤博史

会場＝PLAT アートスペース

PLAT ダンスプログラム 伊藤郁女

「私は言葉を信じないので踊る」

振付家・ダンサーの娘と彫刻家の父、

文化的な隔たりで離れてしまった2人の再生の物語。

TOPICS

乗越たかお[のりこし・たかお] / 作家・ヤサぐれ舞踊評論家。株式会社ジャパン・ダンス・ブлаг代表。06年にNYジャパン・ソサエティの招聘で滞米研究。07年イタリア『ジャポネ・ダンス』の日本側ディレクター。現在は国内外の劇場・財団・フェスティバルのアドバイザー、審査員など活躍の場は広い。著書は『コンテンポラリー・ダンス徹底ガイドHYPER』(作品社)、『どうせダンスなんか観ないんだろ!!』(NTT出版)、『ダンス・マイブル』(河出書房新社)など多数。現在、月刊誌「ぶらあほ」でコラム「誰も踊ってはならぬ」を好評連載中。

はじめ伊藤は手に仮面を持っていて、カラフルな衣裳を身につけている。父は椅子に座ったまま。仮面を着けるとフィット感が尋常じゃないので、ちよつと怖い。そして身体の奥底から絞り出すような声をあげ、うずくまり、のたうち回るのだ。まるでもう一度生まれ直しているかのような、命がけの迫りに満ちている。

仮面と衣裳を外すと、父と同じ黒い衣裳。父が立ちあがり、ピアノ曲が流れる。伊藤はマイクを持ち、父に質問を浴びせつける。

「なぜ私の友だちを嫌いの?」

「レストランで、どうしていつも母の財布で勘定するの?」

「あとどれくらい生きる?」

「私がおう娘ではないことが怖い?」……

淡々としている。しかし不意にドキリとするような言葉が差し込まれる。ときに父は答える。父は娘をダンスに誘い、古い流行歌も一緒に歌う。だが二人の間には、つねにある種の「よそよそしい空気」が漂っているのだ。

親子でありながら共にアーティスト、という関係は、ど

んなものなのだろう。父として、先達として、なにかを伝えたい、アドバイスをしようとはしてきたに違いない。そしてもちろん成長期の娘にとって、それはいつまでも子ども扱いされているように感じてしまう。しかしいまや娘は遠くヨーロッパでダンサーとして成功し、長く会えない期間ばかりが増えていく。10年ぶりに実家に帰ったとき、伊藤の部屋は出たときのままだったという。時間が止まっている。しかし本作では時間と空間の隔たりを超えて、いやむしろ隔たりによる物理的・精神的な距離感によって、はじめて二人は舞台の上に共に立っているようにみえる。

日本では、あまりこうした個人的な事情や、家族の関係性を描くダンス作品は多くないが、ヨーロッパではけっこうある。もはやコンテンポラリー・ダンスは、「技術の披露などではなく、ときに舞台上に存在する身体(それは当然、日常を生きている身体でもある)を晒し、人生そのものを問う」というのがひとつの大きな流れだからだ。

実生活でも伊藤が日本に帰ると、父はダンスホールで伊藤と踊りたがり、伊藤はそれを嫌がっていたそうだ。時間をかけて熟成された距離感や隔たりは、ゼロになることはない。しかしいまや世界有数のダンサーとなった娘は、舞台上で父の手を取る。間に合って良かった。これは国を超え、世代を超えて胸を打つ瞬間なのである。

伊藤郁女

テキスト・演出・振付・出演

今回、私の生まれ故郷の豊橋で、父との作品が実現できることを、本当に楽しみにしております。豊橋の思い出は、私の祖父の家、小さな電車などに乗った事を思い出します。

この作品では、自分が海外に出て13年間、あまり話せなかった父親に今までしづらかった質問をします。そして、作品の最後には父の答えが聞こえます。その中で父と一緒に踊ることで、言葉を超えた会話が成り立っています。

父は67歳で踊りを始めました。この作品を作り始めた時、彫刻家の父が、娘の私のために、毎日ジムに行って訓練を始めました。

これまで3年ほどの間、世界各地でこの作品を約100回一緒に上演しました。父の踊りは素晴らしく、そして面白いので、世界中で好評です。

伊藤郁女[いとう・かおり] / 5歳よりクラシックバレエを始める。NYのアルビン・エイリー・ダンスシアターにて研鑽を積む。03年フィリップ・ドックフレ『Iris』に抜擢。以後、ブレルジョカージュの作品に参加するなどフランスを拠点に活躍。シディ・ラルビ・シェルカウイ(『眠れる美女』ほか)や、アラン・プラテル(『Out of Context - for Pina』)ともコラボレーションを行う。08年に初の自作を創

作し、本作以外にも『Asobi』『La religieuse à la fraise』『Robot, I'am our éternel』など精力的に発表。現在パリの3つの市立劇場とレジダンス・アーティストの契約を結ぶなど、飛ぶ鳥を落とすほどの勢いで躍進している。アヴィニヨン演劇祭にも参加。15年SACDより新人優秀振付賞、フランス政府より芸術文化勲章シュヴァリエを受賞。

浦辺千鶴 [うらべちづる] / 神奈川県生まれ。上智短期大学英語学科、東京女子大学文学部英米文学科卒業。小田島恒志、山内あゆ子両氏に師事。2009年には、小田島恒志氏との共訳により、『シェークスピア・ザ・クロー] (新国立劇場) を手掛ける。また、『星ノ数ホド』(2014年)、『月の獣』(2015年)の翻訳で、第8回小田島雄志・翻訳戯曲賞を受賞。近年の主な翻訳作品は、『パッション』(2015年)、『君が人生の時』『CRIMES OF THE HEART 一心の罪一』(2017年)、『FUN HOME ファン・ホーム ある家族の悲喜劇』(2018)など。

とは、のびのびとできると思うんですけど、どうですか。
 浦辺——そうですね、やはり、どういう世界になっていくのか、まったく見たことがないものをつくっているのだというのは、とてもあくわくします。そして、すごい達成感はあるものの、読めば読むほど、「ここ、ちょっと」というのもあって、何か「よーし」とは思いきれないのですが。
 中島——今回は、どのぐらいの日数を掛けたのですか。
 浦辺——いつも私、期限ギリギリまでご迷惑をお掛けしてしまうのですが、4ヶ月くらいでしょうか。
 中島——例えば、新作の映画を見た時、台詞が聞けるでしょ。その時に、字幕が思いもよらない訳になっていた時に、「あ、この訳うまいな」と思う時とかあるのです。
 浦辺——ありますね。ありますよね。
 中島——やはり、映画やテレビも、洋画を見ることが多いですか。
 浦辺——多いですね。字幕で見て、時間があれば、吹替で見て、「ああ、なるほど、こういう言い方してるんだ」とか。やはり字幕と吹替も、また、違うので。メモメモです。
 中島——翻訳される方は女性のお名前が多いのですが、翻訳って、女性に向いているんでしょうか。
 浦辺——そうですね。結構、緻密にかつ、心で見ているのが醍醐味的なところもあるので、人が好きだったり、人の心理が好きだったりとか、やはり、結構とういうのが好きな女性は多いですね。
 中島——最後に一言、この本の中で、これを感じてほしい、これを伝えたいというのがあれば。
 浦辺——パッと見、人を殺すシーンが多いですし、人を殺すのが好きな単なるモンスターみたいに、思いがちですが、すぐそのデリケートな、繊細な人間の内面もあわせて彼の気持ちの動きが描かれているので、そのバランスがすごく面白い作品だと思います。
 中島——豊橋の人たちにもその繊細さが伝わればなと願ってやみません。ありがとうございます。

重要な要素に思えたので、余計に難しかったたです。
 言葉遊びは、彼の一面をよく表している部分だと思いますので、下手に意味を活かした日本語にしてしまうと、原文では感じられる、主人公が「言葉遊びをするような人」という部分が消えてしまうため、意味的に外れないようにしつつ、同時に言葉遊び的な部分があるような日本語に置き換えるというのがとにかく難しかったです。
 イギリスの戯曲は本当に言葉遊びが多いですね。今回はもちろんアイルランド出身の作家の戯曲ですが、やはりイギリスの影響を色濃く感じました。
 それと、すごく風景描写が多いですし、台詞の中でも、ちょこちょこ入ってくるんです。やはりきれいな描写もあって、イメージが湧くというか。それが、またちょうどその場面のそれぞれの心象風景的な、登場人物の心理に合ったような風景だったりするのです。
 中島——IRA(北アイルランド共和軍)の物語といわれると、遠い国の話のように感じるのですが、小さな島という日本との共通点で、切り離された感覚というのは、少し理解できるかなと思うのです。
 浦辺——そうですね。話しが進んでいく中で、キーワード的というか、彼を「あなたってこういう人よね」と、親しい人から何回か言われるのですが、少しネタバレ的になってしまうかもしれませんが、今回主人公のヴィクターは、人をためらいもなく殺したり痛めつけたりできる人物である一方、彼の本当の性格を知る幼馴染や母親からは「色々なことを怖がっている」とか「内面は女の子だ」等言われる人物でもあります。
 その部分が彼のコンプレックスになっていて、それを打ち消したくて恐らく必要以上に暴力的な行動になっているのだと思いますが、一方で芸術や外国語等にもとても関心が高い一面もあります。
 中島——誰も訳しても、演出もしていない。新作というこ

6月29日[金]19:00開演・30日[土]16:00開演
 7月1日[日]13:00開演
 作=シェーマス・スキャンロン
 翻訳=浦辺千鶴
 演出=小川絵梨子
 出演=松坂桃李・浜中文一、趣里・小柳心、谷田歩/高橋恵子
 会場=PLAT主ホール

これは、ヴィクター・マクガワンの暴力性と悲しみに満ちた3年の歳月と、暴力が彼自身をも壊していく過程を、3部に渡って辿る「悲劇」である。

「マクガワン・トリロジー」

殺伐とした中の デリケートで繊細な人間のお話。 浦辺千鶴

聞き手 中島晴美 種の国とよはし芸術劇場ロマンシアプロデューサー

翻訳



中島——小川絵梨子さん演出による『マクガワン・トリロジー』を翻訳された浦辺千鶴さんにインタビューをお願いして、今日、実現して、ほんとにありがとうございます。
 浦辺——光栄です。ありがとうございます。
 中島——まったくの日本で初上演ということで、この本を最初にいただいた時、どんな感じでしたか。
 浦辺——最初に読んだ時に思ったのは、(翻訳者が)私でいいのかな、ということでした。本作は内容もハードで、男性だけの場で口汚く罵りあったり、殺伐とした状況下での男性同士の会話も多く、男性翻訳者の方がリアルな言葉が出せるのではないかと不安に思った記憶があります。なので、逆に翻訳する時には、その点を特に気を付けました。
 若干特殊な、殺伐とした場にふさわしい男性の会話になるように頑張ってみたつもりですが、男性の方が読んで(聞いて)どう思われるのか、内心ちょっと怖いです。
 中島——訳はどのようにされるのですか。
 浦辺——まず英語で読んで、だいたいの世界観、登場人物の性格を頭に入れます。性格によって人の話し方がいろいろあるじゃないですか。この状況に、この性格の人が置かれたら、どの程度の強さで話すかなとか。そういうのを頭に入れた上で訳し始め、とにかく最後まで訳し、次に、英語をもう一回見つつ、一文一文、照らし合わせてみて、微調整しながら直し、その後、日本語と英語とを照らし合わせていると、その時は、わかったつもりでも、日本語だけで読むと英語に引っ張られ、日本語として、わかりづらいところがあるので、そこを日本語だけで読んで、スッと入るように心がけています。
 それから、今回の戯曲は、台本の書き方がとてもイギリス的だと思います。とにかく言葉遊びに満ちています。言葉遊びは日本語にするのが難しく、翻訳者泣かせの大きな要素の一つだと思いますが、今回の場合は主人公のキャラクターを考える上で「言葉遊び」が結構

「ザ・空気 ver.2」 誰も書いてはならぬ

8月30日[木]19:00開演・31日[金]13:00開演

作・演出＝永井愛

出演＝安田成美、眞島秀和

馬淵英里何、柳下大、松尾貴史

会場＝PLAT主ホール

INTERVIEW : 3



中島——永井さんは役者も経験がおありだから、やはり言葉に出してみるのですか。

永井——しゃべりながら書いている。で、言いにくいと言ひ回しを変えます。お客さんには音として聞こえるので、漢字を読めばわかっても、言葉にするときには注意します。同音で違う言葉がある場合は、できるだけ一発でわかるようにします。読み合わせの段階で、役者さんが、ポロっと言い間違えて、そっちの方がいいということに変えていく場合もあります。決して完璧じゃないから、よりベターなものを選びたい。

中島——副題が「誰も書いてはならぬ」ですが、これは、どういう時に思いついたのですか。

永井——私の場合は、まだ書いてないうちに題を決めることが多いので、この方向に向かって、かきたててくれるかなと思える副題をつける。これなら絶対安全という題はあるのですが、それだと面白くないので。この「誰も書いてはならぬ」は、ほんとにそういうものが書けるのかと、自分に負荷をかけないときけないものの方が面白いなと思ってつけた題です。

中島——現実のニュースの局面が、クルクル変わって、今、日本は、どこにいるのかという感じですね。

永井——ニュースは、毎日よく見ますね。見ているので、書けないみたいな。

現実の展開がすごく、劇の方がかすんじゃうくらいですね。局面が変わっているようでありながら、起きていることは一つのような気もします。今回の一連の、次から次へとポロポロ出てくるものはみんな連鎖しているし、結局は国民への不誠実とか、人権感覚のなさに戻ってくる。で、そのことを国民自身がどう考えるのかというところに、また戻ってきますよね。

今回は、記者クラブに焦点を当てた話なので、前の『ザ・空気』の報道への、外側からの圧力というのと、ちょっと違う。

中島——基本的には、フィクションの中に、愛さんのイメージで進んでいっているという感じですか。

永井——ノンフィクションを元にしています。ノンフィクションの方が計り知れないし、元になった話の構造を使って、私に何ができるかということですね。想像を超えるような話にこそリアリティーがほしいので、あつた話を元にして、ジャンプしたいと思っています。

今は資料を読み込みながら書いている段階ですが、資料は過去の現実ですから、その過去を柱にしつつ、未来の現実にも目を光らせていかないと、日々いろんなことが更新されているので。

中島——豊橋とすれば、毎回新作をやれ、再演の『書く女』『兄帰る』はキャストもバージョンも違う。

永井——豊橋のお客さんは芝居を見慣れているから、厳しいけど、すごく創造的な空間を一緒に作り上げてくれるので、やりやすいですね。

中島——今回プレトークもありますので、また違った角度で、物書きとしての愛さんを、もうちょっとみんなに伝えたいなと思っています。どうもありがとうございました。

中島——『ザ・空気』が一つの完結されたものとしてあって、ver.2ができたのでしょうか。

永井——最初はver.2はなかったのです。このことをポロっと言っちゃったのはアフタートークで、ふっと出ちゃったのです。『ザ・空気』の手ごたえが良かったこともありますね。空気というのは、私たちの生きている、特にこの日本という国を表すのに、かなりなキーワードで、たまたまメディアの話を書いているけれど、これは、私たち自身の物語でもあるなということ、もうちょっと掘り下げてみたいなと思いました。

中島——国会の記者の話と伺いましたが。

永井——官邸記者クラブの記者たちの、国会記者会館の屋上という場での話です。記者クラブが占有している国会記者会館ですから、当然、所属していない人は入れない。だから逆に、そこに所属していない記者の存在を考えさせ、対記者クラブ所属のジャーナリストという対比が出てくると思います。

その時、中心人物のビデオジャーナリストの女性を安田成美さんと思いました。安田さんは、もうずいぶん前ですが、初舞台の『シルビア』を観たときから、イキイキしていて何てすてきな女優さんだろうと思っていました。

中島——いつもキャスティングが新鮮で、どんなものができののらうという期待が膨らみます。

永井——書く前にキャスティングしているので、いろいろ動いたりもしつつ、中心のビデオジャーナリストを基準に、どういう人を配置したいのかは、すぐ決まりましたね。そんなに役者さんを知ってはいないので、スタッフや、うちの制作とか、芝居や映像をよく見ている人に相談して決める場合が多いです。

この役を誰がやるかということも大事だけど、集まった時の色合いというか、並ただだけでエキサイティングな気持ちになれるようなキャスティングを目指しています。今回の顔合わせもとても面白いと思います。でも役者さんは心配でしょうね。何をしゃべらせられるか、わからないで引き受けるわけだから。

中島——言葉が染み通っていかないかなと思う時、そのシーンを書き換えとかなさるのですか。

永井——もう、何度も何度も、一行ずつ書き直している。だから、パッと書いて書き直すというよりも、書き直しながら順次更新されていきますね。

中島——それは、内容ではなくて、選んだ言葉が。

永井——やっぱり言葉ですね。「あ、こんなこと言わないわ」とか、「こんな言い方変だわ」とか、「この人こういう欲求を持たない」だとか、どんどんどん直していつて。どんな人物かわからせるために、外側から説明しようとしたセリフがだんだん空虚なものに見えてくるので、その役の内部から発信される言葉に変えていく。別に、美しい表現とかではなく、リアリティーとリズムがすごく大事で、同じ内容でも、リズムよく言った方が、舞台では効果的だったり、強くなったりする。だから、こんなことを言ったらきつい、とかでは書き直さない。言う必要があるなら、言った方がいいわけだから。

このことをどう書くべきか？しかし書くとしたらどうなるか？いや、そもそも書くべきなのか？

これは、私たち自身の物語でもある。永井愛

作演出

永井愛[ながいあい] / 劇作家、演出家、二兎社主宰。桐朋学園芸術短期大学演劇専攻卒。身辺や意識下に潜む問題をすくい上げ、現実の生活に直結したライブ感覚あふれる劇作を続けている。代表作に『ら抜き殺意』『見よ、飛行機の高く飛べるを』『こんにちは、母さん』『歌おせたい男たち』『書く女』『ザ・空気』など。鶴屋南北戯曲賞、岸田國士戯曲賞、朝日舞台芸術賞、秋元松代賞、芸術選奨文部科学大臣賞、読売演劇大賞最優秀演出家賞などを受賞。

矢作——新国立劇場の演劇芸術監督としての最後の作品を、蓬萊竜太さんの新作で思われたのは何故ですか。

宮田——これから先のことも視野に入れて締めくくりたいと思っていました。就任した時から、今、日本人として、どういふにこの国の演劇や言語と向かい合っていけば良いだろうという発想で企画を決めていたので、その意味では既成の作品で終わるのではなく、新作でできることになって良かったです。でも怖いですね。

矢作——なかなか、安心できるタイミングで脚本をフィニッシュしていただける方はいないですね。

宮田——所属している青年座が書き下ろしだけを上演する劇団ですから、常に劇作家の方たちとお付き合いしてきていたので慣れてはいたのですが、劇作家さんの開拓がなかなか難しいです。新作はリスクが高いじゃないですか。蓬萊さんみたいなベテランの作家さんでさえ、言わば賭けですものね。新国立劇場は、井上ひさし先生で大きな賭けを毎度毎度経験し、そのたびに劇場中でヘトヘトになるまで気をもんできたという過去もあります。なんとかほどほどのいい時期に書き上げてもらうわけにはいかないものかと思えますね(笑)。現場の幸せのためにはぜひそうして、と思います。

矢作——蓬萊さんに、書いてもらいたいと思われたポイントはどいったところですか。

宮田——新国立劇場では『エネミー』と『まほろば』(岸田國士戯曲賞受賞)を上演しており、いざ誰に頼もうかとなると、やはり蓬萊さんがまず思い浮かびます。

常にフラットに、その時代時代をいつも見ておられるので、投げると、本当に嘘がない視点が返ってくることを信頼しています。空気をうまくつかんでいる。

庶民の等身大からの視点を持ってくださっているから、どんな広い話題も、必ず身近なところに落とし込んでくれます。家族や仲間の中の話が多いと言っても、閉じこもってない。すごく視野が開けている。

矢作——今回の『消えていくなら朝』は宮田さんからはこんな話をと、リクエストされたのですか。

宮田——お互いが持ち寄ったものになっています。実は、私からはもう少し社会的なことを最初投げていました。オリンピックも控え、グローバル化があちこちで言われているけど、グローバル化って何だろうね。皆が英語を話せ、外国の方たちと敷居なく話せるようになれば良いのか。いやいや、そうじゃなく、日本独自の文化というのをちゃんと持ってないとまずいとか言われている中で、どう覚悟を決めているのだろう。どうにも気持ち悪いなと思っていました。それを身近な問題として、例えば、家族の中に取り入れてみて、切実な問題として入ってこないかなとか、私がブツブツ。蓬萊さんは蓬萊さんで、ちょうど40歳という節目の年になり、追い立てられるように仕事しているけど、ふと、戯曲を書くとはどういうことなのだろうと考えておられた。それがうまく両方とも入ってくるような話にまとまってきそうです。それで、ちょっと違う視点で「自分の家族自体が結構特殊だと思っているので、そんな感じを書きたい」と言うので。おもしろいね、じゃあ任せますと。

矢作——8年間の芸術監督を通して、地方の公共劇場の状況に対して思われることはありますか。

宮田——お互いが交流できていくなれば良いなとは思っています。残念ながら一方通行みたいに新国立劇場の作品がお伺いするだけの形になっていて。オペラは地方招聘枠というのがありますが、演劇ではそれを作れていない。

それから、この間『荒野野』を作ってらっしゃいましたが、あのような作品を作れるのは本当に体力のある劇場でしかできない。ましてや、東京にも公演に持っていらした。本当にすごいなと敬服しました。そういうことがどんどん広がっていくと良いなと思います。なかなかないですね。

矢作——豊橋は、平田満さんという人が居られたのが

誰もが体験している「日常」を丁寧に紐解いていく
新国立劇場・芸術監督の任期最後となる演出を務める

演劇のいろんな形を楽しんでください。
宮田慶子

聞き手 矢作勝義 穂の国とよはし芸術劇場ROKUSAKI芸術文化プロデューサー

演出

INTERVIEW:4

幸運でした。平田さんがいらっしゃらなかったら多分こういう形の劇場にはできなかったと思います。

宮田——もちろん新芸術文化アドバイザーとして桑原さんも関わられ、桑原さんは『彼の地』では北九州の俳優さんたちと作品を作っていらして。ああいうのもどどん、東京でできるとおもしろいですし、もっと大勢の方が見てくだされば良いのと思います。

矢作——東京公演は金銭的にもギリギリ背伸びをしているので、頻繁にすることは難しいですね。

宮田——大変だと思います。ただし、作り手の立場で言うと、あんなに楽しいことはない。私も毎年、2カ月滞在型で仙台に10年ほど行きましたし、尼崎も広島も札幌でもやりました。演出家として、いろんな意味での腕力を付けさせてもらったと感謝しています。地方に行ってみると、いい役者さんが本当にいらっしゃるし、そういう方たちに出会って舞台を作る時のおもしろさは本当にいいです。いろんな形でそこでしかできない作り方で、ぜひとも各地方やってもらいたいなと思います。新国立劇場の作品を呼んでくださるのもとってもうれしいですが、その地域で演劇をなさっている方と一緒にというのは、理想ですよね。

として、東京ではいろんなものが同時に、いろんな劇場で行われています。だから、いろんなタイプの芝居をどんどんお持ちしたいと思います。今年度の『赤道の下のマクベス』と『1984』と『消えていくなら朝』と、全くタイプが違います。

特に私が思うに、東京の高校生も実は演劇を見てないので。実は、この週末、米子ですと高校生たちと芝居作りをしていて、昨日、へろへろになって帰ってきました。地方の方が、高校演劇も元気だということもありますし、劇場で声をかけると来やすいのでしょうか。

だからぜひとも若い人たちに、いっぱい見てほしい。それで、「みんな地元に残って、劇団作ろうよ!」といろんなところで言っています。

矢作——最後に、豊橋のお客さんに対して、一言コメントいただければと思います。

宮田——4月にも『赤道の下のマクベス』で伺わせていただいて、本当に熱い客席なのだと、よく分かりました。ぜひともその思いにお応えできるような作品にして持っていければと思います。またちょっとタイプの違う作品ですが、演劇はいろんな形があるので、次は、どうなるのかなと思って、ぜひとも楽しみに、お待ちしておりますと思います。

宮田慶子[みやた・けいこ]／翻訳劇、近代古典、ストレートプレイ、ミュージカル、商業演劇、小劇場と多方面にわたる作品を手がける一方、演劇教育や日本各地での演劇振興・交流に積極的に取り組んでいる。1998年芸術選奨文部大臣新人賞(新国立劇場『ディアライアー』)、2001年第43回毎日芸術賞千

田是也賞、第9回読売演劇大賞最優秀演出家賞(青年座『赤シャツ』『悔しい女』、松竹『サラ』)など。10年より新国立劇場演劇部門の芸術監督に就任。主な演出作品に、『君が人生の時』、『ブライムたちの夜』など。また、オペラ部門では『沈黙』(12・15年)を演出。16年より新国立劇場演劇研究所所長。

8月8日[水]19:00開演

作=蓬萊竜太

演出=宮田慶子

出演=鈴木浩介、山中崇、高野志穂、吉野実紗、梅沢昌代、高橋長英

会場=PLAT主ホール

その家族に、何が起こるのか

「消えていくなら朝」

PLAT主催公演情報

チャボロ・シュミット・トリオ
「ジャズ・ナイト・イン・パリ」



ミュージカル・コメディ
「キス・ミー・ケイト」



「消えていなら朝」



鈴木浩介

高橋長英

KAKUTA「ねこはしる」



撮影・相川博昭

劇団四季
ファミリーミュージカル
「魔法をすてたマジヨリン」



撮影・阿部章仁

「ゲゲゲの先生へ」



佐々木蔵之介

松雪泰子

白石加代子

林家正蔵 独演会



ブラットワンコインコンサート



trio Flap【トリオ・フラップ】

ワークショップファシリテーター養成講座



6/29 [金] 19:00開演・30 [土] 16:00開演

7月1日のみ



7/1 [日] 13:00開演

「マクガワン・トリロジー」

●作＝シェーマス・スキャンロン●翻訳＝浦辺千鶴●演出＝小川絵梨子●出演＝松坂桃李・浜中文一、趣里・小柳心、谷田歩／高橋恵子●会場＝PLAT主ホール●前売予定枚数終了：当日券についてはお問い合わせ下さい。

7/8 [日] 16:00開演

チャボロ・シュミット・トリオ

「ジャズ・ナイト・イン・パリ」

10年ぶりに来日する世界最高峰ギタリスト、チャボロ・シュミットによるギタージャズコンサート。スウィング・ギターの王者ジャンゴ・ラインハルトの最も忠実な後継者といわれるチャボロ・シュミットの目で追えない超高速の指さばきにご注目ください。●出演＝チャボロ・シュミットほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]一般4,000円、ユース(24歳以下)2,000円 ※ゲルティック・クリスマス・コンサート(12/9主ホール)とのお得なセット券(一般8,000円)あり

好評発売中



7/15 [日] 12:00開演／16:30開演

平成三十年度(公社)全国公立文化施設協会主催 東コース

「松竹大歌舞伎」

●出演＝尾上菊之助ほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]S席10,000円、A席7,000円、B席5,000円ほか

好評発売中

12:00のみ



7/22 [日] 12:00開演／17:00開演

7/23 [月] 13:00開演

ミュージカル・コメディ「キス・ミー・ケイト」

松平健が再びブラットに登場!豪華な出演者がお贈りする、歌にダンス、笑いに満載!ハッピーエンドでお楽しみいただけるミュージカル。シェイクスピアの喜劇「ジャヤ馬ならし」を劇中劇に仕立て、舞台裏と交互に見せる「バック・ステージ・ミュージカル」の傑作です。●作詞・作曲＝コール・ポーター●脚本＝ベラ&サミュエル・スビワック●訳詞＝なかにし礼●翻訳＝丹野郁弓●演出・振付＝上島雪夫●出演＝松平健、一路真輝、水夏希、大山真志、川崎麻世、ちあきしん、杉山英司(スギちゃん)、太川陽介ほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]一般5,000円、ユース(24歳以下)2,500円

好評発売中

23日のみ



7/27 [金] 19:00開演・28 [土] 14:30開演

PLATダンスプログラム

伊藤郁女

「私は言葉を信じないので踊る」

●テキスト・演出・振付＝伊藤郁女●出演＝伊藤郁女、伊藤博史●会場＝PLATアートスペース●料金＝[全席自由・日時指定・整理番号付]一般3,000円ほか

好評発売中

マイセレクト4



8/8 [水] 19:00開演

「消えていなら朝」

●作＝蓬萊竜太●演出＝宮田慶子●出演＝鈴木浩介、山中崇、高野志穂、吉野美紗、梅沢昌代、高橋長英●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]S席5,500円、S席ペア10,000円、A席4,500円、B席3,000円ほか

好評発売中

託児サービス対象公演

要予約。生後6ヶ月以上。
お一人様¥500。お申込み、お問合せはプラットチケットセンターまで



マイセレクト4 対象公演



チケットの購入・お問合せ
プラットチケットセンター

●劇場窓口・電話0532-39-3090[休館日を除く10:00～19:00]
●オンラインhttp://toyohashi-at.jp[24時間受付・要事前登録]

U24・高校生以下割引ご案内 ほぼすべての財団主催公演に、若い人にお得な料金を設定しています。

●料金＝U24[24歳以下対象]:公演ごとに指定する席種の半額/高校生以下:一律1,000円
●購入方法＝各公演の一般発売初日から窓口にて取扱い。
●その他＝本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。座席の指定はできません。要・入場時身分証明書提示。

8/30 [木] 19:00開演・31 [金] 13:00開演

二兎社公演42

「ザ・空気ver.2」誰も書いてはならぬ

好評発売中

31日のみ



●作・演出＝永井愛●出演＝安田成美、眞島秀和、馬淵英里何、柳下大、松尾貴史●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]S席5,500円、A席4,500円、B席3,000円ほか

9/8 [土]・9 [日] 14:30開演

PLAT小劇場シリーズ

劇団てふく劇場

「ただいま」

1990年に宮崎県都城市で結成され全国で活動するてふく劇場。豆腐職人の男、文具店に勤める女、主婦、仕事を探す音、をんな市井の人々のかげのいのない日々の物語をお届けします。●作・演出＝永山智行●出演＝あべゆう、かみもと千春、濱砂崇浩、大迫紗佑里、中村幸●会場＝PLATアートスペース●料金＝[全席自由・日時指定・整理番号付]一般3,000円ほか

好評発売中

マイセレクト4



9/15 [土] 14:00開演

9/16 [日] 12:00開演／16:00開演

9/17 [月・祝] 14:00開演

「不思議の国のアリス」

世界を魅了してきた名著「不思議の国のアリス」をモチーフに、NHK「からだであをば」などで子どもたちに人気のダンサー・振付家の森山開次実力派ダンサー&スタッフ陣で贈ることもととのためのダンス作品です。●会員先行＝6月16日(土)●一般発売＝6月30日(土)●原作＝ルイス・キャロル●テキスト＝三浦直之●演出・振付＝森山開次●出演＝森山開次、辻本知彦、島地保武、下司尚実、引間文佳、まりあ●会場＝PLATアートスペース●料金＝[全席自由・日時指定・整理番号付]大人3,000円、子ども(4歳～高校生)500円ほか

16日12:00のみ



マイセレクト4

9/29 [土]・30 [日] 13:00開演

「チルドレン」

ブロードウェイ、ウエストエンドを震撼させた超話題作!大地震、津波、そして原子炉の停止...いま世界が最も注目する女流作家ルーシー・カークウッドによる悪寒とサスペンスに満ちた傑作を実力俳優たちがお贈りします。●会員先行＝6月30日(土)●一般発売＝7月14日(土)●作＝ルーシー・カークウッド●演出＝栗山民也●翻訳＝小田島恒志●出演＝高畑淳子、鶴見辰吾、若村麻由美●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]S席7,500円、A席6,000円、B席4,000円ほか

29日のみ



10/6 [土]・7 [日] 14:30開演

PLAT小劇場シリーズ

KAKUTA

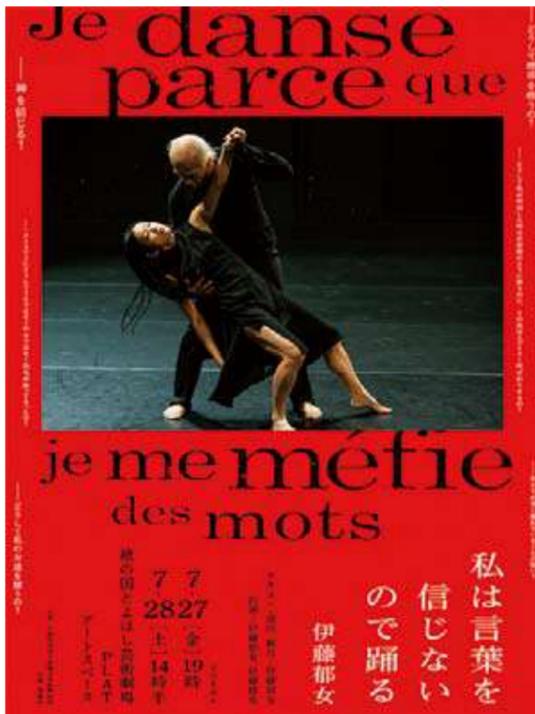
「ねこはしる」

子ねことさかなの友情を描いた工藤直子の「ねこはしる」を、うたとことばの朗読音楽会としてお届けします。●会員先行＝6月16日(土)●一般発売＝6月30日(土)●作＝工藤直子「ねこはしる」(童話屋刊)●構成・脚色・演出＝桑原裕子●会場＝PLATアートスペース●料金＝[全席自由・日時指定・整理番号付]大人3,000円、子ども(4歳～高校生)500円ほか

7日のみ



マイセレクト4



伊藤郁女「私は言葉を信じないので踊る」

10/8 [月・祝] 17:00開演

劇団四季 ファミリーミュージカル

「魔法をすてたマジヨリン」

●会員先行＝7月14日(土)●一般発売＝7月15日(日)●初演オリジナル企画・演出＝浅利慶太●台本＝劇団四季文芸部・梶賀千鶴子●作曲＝鈴木邦彦●振付＝飯野おさみ、加藤敬二●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]S席大人5,400円(小学生以下3,240円)、A席大人3,240円(小学生以下2,160円)

10/27 [土]・28 [日] 13:00開演

「華氏451度」

華氏451度ーこの温度で書物は燃えるー。思想管理のため本が忌むべき禁制品となった近未来、本の所持が発見されるとただちに焼却させることになっていた…。傑作ディストピア小説が初舞台化!●会員先行＝7月7日(土)●一般発売＝7月21日(土)●原作＝レイ・ブラッドベリ●演出＝白井晃●上演台本＝長塚圭史●出演＝吉沢悠、美波、吹越満、堀部圭亮、粟野史浩、土井ケイト●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]S席7,000円、A席5,000円、B席3,000円ほか

28日のみ



11/2 [金] 19:00開演

野村万作・野村萬齋 狂言公演

人間国宝・野村万作と現代劇や映画など幅広く活躍する野村萬齋が率いる「万作の会」による狂言公演です。●会員先行＝7月28日(土)●一般発売＝8月11日(土・祝)●出演＝野村万作、野村萬齋ほか万作の会●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]S席5,000円、A席4,000円、B席2,000円ほか※発売日初日はお一人様一申込につき2枚までの枚数制限有り。

11/3 [土・祝] 13:00開演／18:00開演

11/4 [日] 13:00開演／17:00開演

高校生と創る演劇

「滅びの子らに星の祈りを

～Dystopia before Utopia～

●会員先行＝9月1日(土)●一般発売＝9月15日(土)●脚本・演出＝須貝英●会場＝PLATアートスペース●料金＝[全席自由・日時指定・整理番号付]一般2,000円、高校生以下500円ほか

3日13:00のみ



11/9 [金] 19:00開演

11/10 [土]・11 [日] 13:00開演

「ゲゲゲの先生へ」

水木しげるの作品群とその哲学思想や世界観を原作に、前川知大が現代を舞台にしながらも日常に隣り合わせた少し不思議な世界を描きます。●会員先行＝8月4日(土)●一般発売＝8月18日(土)●原案＝水木しげる●脚本・演出＝前川知大●出演＝佐々木蔵之介、松雪泰子、白石加代子ほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]S席8,000円、A席7,000円、B席5,000円ほか※発売日初日はお一人様一申込につき4枚までの枚数制限有り。

10日のみ



11/24 [土] 14:00開演

林家正蔵 独演会

2016年12月にKAKUTA「愚図」で俳優として登場した林家正蔵が、落語家としてブラットに登場!●会員先行＝8月25日(土)●一般＝9月8日(土)●出演＝林家正蔵●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]一般2,800円ほか

若手音楽家育成事業

ブラットワンコインコンサート

「若い音楽家には活躍の場を、お客様にはより音楽を楽しめる機会を」と企画されたPLATオリジナルのワンコインコンサートです。500円で贅沢なひとときをお過ごしください。●会場＝PLATアートスペース●料金＝[全席自由・整理番号付]500円

6/21 [木] 14:00開演

「Afternoon Concert ～初夏の訪れ～」

trio Flap【トリオ・フラップ】加藤千理(フルート)、鷹松李奈(フルート)、天野あそ子(ピアノ)

8/2 [木] 14:00開演

「リズム・ステップ・ダンス～舞曲で巡る世界～」

Le deux mai【ル・ドゥーメ】香名大地(打楽器)、鈴木結花(ピアノ)

好評発売中

ワークショップファシリテーター養成講座2018前期

長期的・継続的な視点でワークショップの進行をする人材「ワークショップファシリテーター」を地域に育成する連続講座。前期では最終日の「ワークショップ縁日」に向けて、ワークショップをつくりながら進行について学んでいきます。

●日時＝7/21 [土]・7/22 [日]・8/18 [土]・8/25 [土]・8/26 [日]・9/1 [土]・9/2 [日]10:00-17:00(全7回通し)●講師＝すずきこた、柏木陽、吉野とつき●会場＝PLAT●対象＝18歳以上で、極力全日程参加できる方。演劇経験不問。●料金＝3,000円●定員＝20名(応募者多数の場合は選考)●申込方法＝①申込書に必要事項を記入の上、窓口に持参かFAX0532-55-8192②劇場ホームページの専用申込フォームより申込

シリーズ「古典遊学」

7/10 [火]

文楽学び塾

人形で広がる世界!文楽の人形は何でもできる!

●屋の部13:30～15:00
●講師＝吉田勘彌、吉田養紫郎、桐竹勘次郎
●夜の部18:30～20:00
●講師＝吉田勘彌、吉田養紫郎、桐竹勘次郎
●特別ゲスト＝中本千晶
●参加料＝屋の部500円/夜の部1,000円

7/11 [水] 18:30～21:00

歌舞伎学び塾

中本千晶の熱烈歌舞伎講座&佐々木酒造の日本酒セミナー

●講師＝中本千晶、佐々木晃(佐々木酒造代表取締役社長)
●参加料＝2,000円(利き酒付)、1,000円(利き酒不要の方)
<共通事項>
●会場＝PLATアートスペース
●各定員＝50名(先着順)
●申込方法＝①劇場ホームページ専用申込フォームより②申込書に必要事項を記入の上、窓口に持参かFAX(0532-55-8192)
●締切＝各定員に達し次第締切※定員に満たない場合は当日参加可

オリザさんにはいつもやる気をもらいます。

芸術文化アドバイザー

桑原裕子



今年度より芸術文化アドバイザーに就任した桑原裕子が、全国の芸術監督のお話しを伺うシリーズ。

第1回目のゲストはこまばアゴラ劇場芸術総監督・城崎国際アートセンター芸術監督の平田オリザさん。桑原裕子は、平田さんの代表作の一つ『転校生』の1994年初演時には俳優として出演しています。芸術監督の先輩として、また演劇の師匠、平田オリザさんからお話しを伺いました。

桑原——公共ホールの芸術監督と民間の違いはあるのですか。

平田——税金で運営していますから、まずなにより豊橋市民のためにPLATが、どういう役割を果たせるかを考えなければいけない。

ただ演劇は、とにかく楽しいとか、教育や、経済にすぐに役立つこともあるし、10年、20年スパンの街づくりに役立ったり、100年、200年単位の作品を作り、街の人の誇りになることもある。それを、限られた予算の中で、バランスよくやるのが、芸術監督の仕事です。

本来は、「こういう劇場に」というミッションがあって、それに合った芸術監督を呼んでくるべきだけど、まだ日本では芸術監督がある程度、「こういう劇場にしたい」と自分で言わなければいけないのが、ヨーロッパとの違いですね。

桑原——公共ホールの芸術監督の面白みは。平田——市民のためにバランスのいいプログラムを年間で作るのが、たぶん、一番の面白さだね。例えば、キラリふじみ(埼玉県富士見市)は人口10万人の普通のベッドタウンに、いきなり芸術監督付きの劇場ができちゃった。で、こまつ座とか、二兎社さんとかも、加藤健一さんとかも呼ぶし、フランス

からすぐ前衛的なものも呼んでくる。

そうすると、毎月来る人から「いやあ、先生、今日のは良かったですね、日本語だし」みたいになるんだよ。そして、わからないものもわからないなりに、楽しんでくれるようになる。桑原——どういう目線で作品を持ってくるのかというのが、一つの仕事なのですね。

平田——「今年は、これが目玉ですよ」、「今年は、こういう視点で、ラインナップを組んでみたので、ぜひ、全演目見てください」と、市民に向かってしゃべったり、書いたり、広報に載せてもらったり、市長と対談したり。芸術監督は劇場の広告塔でもある。そうやって、ちょっとずつでも、劇場に付いているお客さんを増やしていかなければいけない。

ヨーロッパの劇場では、バザーをやったり、大晦日にロビーをディスコクラブにしたり、劇場に人が来て、劇場を応援してもらえるように、あらゆる手を使う。だから、桑原さんなりに、いろいろやってみることだね。

これからは、好き嫌いとか、コネだけでなく、スタッフの、ここ面白そうですよっていう意見も聞いて見に行き、自分で呼んでこなきゃ。

例えば、旅公演を考えている新しい劇団を呼ぶとか、伊丹(兵庫県)のAI・HALLで、来年やるらしいよ、じゃあ豊橋もやってよ、と若手を発掘して、バランスをとるってことだね。名古屋は、ほとんど小劇場の公演がない。うちも10年やってない。だから名古屋の人たちは、若手の劇団を見るために、津に通っている。津とPLATで、連携すれば、すぐ厚みが出る。そうすると、名古屋の演劇人や演劇ファンに、「何で名古屋でできないことが、豊橋でできるんだよ」と、うらやましがられる。

劇場には、必ず制約がある。で、その中で、最大限そのパフォーマンスを引き出してあげ

るのも、芸術監督の役割。それは、アーティストを守る役割でもある。

桑原——オリザさんは、東京を離れることになったでしょ。東京一極集中みたいな演劇形態は、もう違うと思ってたということですか。平田——引越すのは、兵庫県が豊岡に、日本で初めて公立で演劇を学べる大学をつくるのが一番の理由です。

東京は、演劇をつくるのにコストがかかりすぎるし、通勤にも時間かかる。東京には、見るお客さんがいるからショーケースとしてはいいけど。でも、つくるのは別でもいいでしょ。

例えば、ドイツの場合、各地方都市に劇場があって、俳優が劇場に所属して、そこに暮らしている。フランスでは、俳優たちはパリにいて、つくる期間だけ劇場のレジデンス施設に滞在する。豊岡には、それがある。

桑原——なるほど。東京に巡業するという考え方。確かに、レジデンス施設があれば役者たちは、もっと自由にいろんな地方に行ける。平田——豊岡は、今、市内39の全小中学校で演劇教育をやっている。でも、そもそも教育のことは、『転校生』が大きかったよね。

当時はまだ、私は尖がった前衛の演出家で、ワークショップとかも、劇団内ではやってたんだけど、外でやったのは初めてだった。それからワークショップのオファーが殺到するようになった。芸術の範囲って広いから、それが、ある時教育に役立ったり、ある時、街づくりに役立ったりとかするけれども、当時、教育に役立つとは、誰も思っていなかった。

だから、芸術監督の仕事も、この若い才能は、今すぐ尖がっているけど、実は、この俳優と組み合わせたら、もっと面白くなるんじゃないかとか。例えば、蜷川さんは、すぐ前衛的な作品をやっていたんだけど、中根さんというプロデューサーがいて、商業の方が向いていると思ったわけですよ。

桑原——オリザさんのすごいとこって、いつも、何かやれる気にしてくれるとこなんですよ。

平田——そうだね。でも、これからは、桑原さんがやる気にさせる立場だからね。

桑原——いつまでも教え子のつもりでいたらダメですね。わかりました。これからもよろしくお願いします。

平田オリザ／劇作家・演出家・青年団主宰。こまばアゴラ劇場芸術総監督・城崎国際アートセンター芸術監督。1962年東京生まれ。95年『東京ノート』で第39回岸田國士戯曲賞受賞。2002年『上野動物園再々襲撃』(脚本・構成・演出)で第9回読売演劇大賞優秀作品賞受賞。03年『その河をこえて、五月』で、第2回朝日舞台芸術賞グランプリ受賞。11年フランス国文化省より芸術文化勲章シュヴァリエ受勲。他、多数受賞。

SUPPORT

知識製造業
三遠機材株式会社
http://www.san-en.co.jp

有限会社 魚伊
電話 52-5256

株式会社 竹尾建築設計事務所
代表取締役 竹尾 誠
豊橋事務所/豊橋市平川南町91-2 千440-0035 Tel.0532-62-1331(代) Fax.0532-62-1332
浜松事務所/浜松市東区流通元町13 千435-0007 Tel.053-422-3628(代)

Gallery 48
呉服町48 TEL.54-4848

グロトリアンピアノ地域特約店
白羽楽器 株式会社
電話053-464-3015

竹内産婦人科
産婦人科 婦人科(不妊治療)
豊橋市新本町23 (豊橋市西産婦人科) 053-464-3015

ケンチク 701
KURONO ARCHITECT STUDIO
y.qlo0170@gmail.com

うつ、統合失調症、精神遅滞、発達障害、脳梗塞、人工透析、人工関節など
豊橋・豊川障害年金相談センター
初回相談無料 ☎0120-891-498
豊橋市花中町160-9 障害年金専門社会保険労務士 竹下英司

看板広告 アラキスタジオ
豊橋市上伝馬町16 電話52-5586番

本と文具なら
精文館書店
TEL.54-2345

医療法人慈豊会
大島整形外科クリニック 院長 大島 毅
東田町井原39の7(市赤赤岩口終点前) 電話62-5511(代)

ONOCOM 株式会社 オノコム

外科・内科・胃腸科・麻酔科・消化器科・呼吸器科
伊藤医院 伊藤之一 伊藤文二
豊橋市小池町字原下35 電話45-5283(代)

創業文政年間 数々く宗
豊橋市新本町40 電話52-5473番

調理と製菓のおいしい資格。
豊橋調理製菓専門学校
豊橋市八町通一丁目22-2 TEL.53-2809

豊橋銀行協会 (順不同)
三菱東京UFJ銀行 みずほ銀行 静岡銀行 名古屋銀行
三井住友銀行 三井住友信託銀行 清水銀行 第三銀行
十六銀行 愛知銀行 中京銀行 大垣共立銀行

御茶屋菓子専門店
若松園
創業江戸
御菓子司

気まぐれコンサート
事務局/0532-62-9259(小川恵司)

安心安全な地下駐車場
パ-ク500 ソウの親子の看板が自印
プラット主ホール・アートスペース公演等へのお客様は30分150円を30分100円(上限4時間まで)に割引します。

整形外科・リハビリテーション科・リウマチ科・麻酔科
医療法人 塩之谷整形外科
理事長 塩之谷 昌 院長 塩之谷 香 副院長 市川義明
豊橋市植田町関取54 電話0532-25-2115(代)

豊橋名産 命あくわ

井上皮フ科クリニック
診療時間 月・火・木 10:00~13:00 16:00~19:00
土 10:00~14:00 休診日=水・日・祝
電話0532-55-7007 愛知県豊橋市向山町字中畑13-1マイルストーン1F

プラス・ワンの付加価値をお客様に提供いたします。
共和印刷株式会社
豊橋市小池町36番地の1 TEL46-3281 FAX46-3285

整形外科・皮膚科・リウマチ科・リハビリテーション科
医療法人 大岩整形外科・皮フ科
院長 大岩俊久 豊橋市大橋通二丁目115 電話55-2100

伝統的工芸品豊橋筆
書道用品専門店
高誠堂
豊橋市呉服町四拾四番地 電話52-5514

本 豊川堂
本店・カルミア店・アピタ向山店・プリオ豊川店
セントファーレ田原店・さしまグループバゲート店

練物專家
たけなご
コアラフロント ホテルアーグリッシュ 1F

ISO9001 ISO14001 愛知ブランド企業 認証・認定取得
株式会社 三光製作所
三光精密工業株式会社
豊橋市佐藤一丁目12番地の3

Storyteller tells the Story
物語コーポレーション

JEANS SHOP YAMATO
豊橋 つつじが丘 / 豊川 千歳通り

生活にファインクオリティ
sala

広告募集

TICKET CENTER

チケットの購入・お問合せ

プラットチケットセンター

電話・窓口
0532-39-3090 [休館日を除く10:00-19:00]
オンライン
http://toyohashi-at.jp [24時間受付・要事前登録]

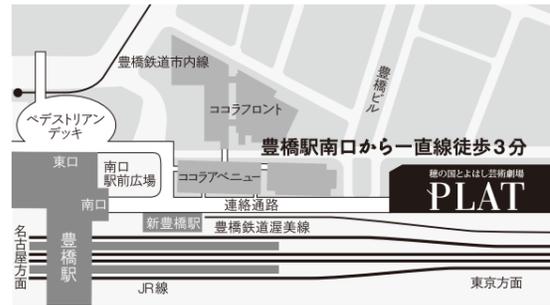


プラットフレンズ募集 入会金・年会費無料

特典
1 公演情報をメールでご案内します。
2 インターネットでごチケット予約ができます。
3 主催公演のチケットを一般発売に先がけてご予約できます。
※劇場窓口またはホームページからご登録いただけます。

U24・高校生以下割引ご案内

ほぼすべての財団主催公演に、若い人にお得な料金を設定しています。
料金
U24[24歳以下対象]:公演ごとに指定する席種の半額
高校生以下:一律1,000円
購入方法
各公演の一般発売初日から窓口にて取扱い。
その他
本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。
座席の指定はできません。要・入場時身分証明書提示。



千440-0887 愛知県豊橋市西小田原町123番地
電話=0532-39-8810[代表]
開館=9:00-22:00 休館日=第三月曜・年末・年始。
第三月曜が祝日の場合はその翌平日。
豊橋駅(JR東海道新幹線、東海道本線、名古屋鉄道)、
新豊橋駅(豊橋鉄道渥美線)直結。豊橋駅南口から徒歩3分。
※駐車場はありません。公共交通機関をご利用いただくか、
お近くの公共駐車場等をご利用ください。

穂の国とよはし芸術劇場 PLAT